

「人生100年時代」の

健康のカギを握る歯科への期待



西沢 邦浩 先生

日経BP総研メディカルヘルスラボ客員研究員

「日経ヘルス」元・編集長

新型コロナウイルスが人体内への侵入に使う受容体ACE2が舌や歯肉にも多いこと、唾液中に多い分泌型IgAが感染防御に重要な役割を果たすということなどから、感染症防御における口腔ケアの役割に対する注目度が高まっています。

もちろん感染症だけでなく、口腔環境は、2型糖尿病、脳・血管疾患、各種がん、認知症といった「人生100年時代」のリスク因子と強く相関を持つとする研究がすでに多く出ているのはよくご存じかと思います。

今こそ、歯科に関わる方々が、口腔が全身の健康の要であるという意識をこれまで以上に強く持ち、またそれを発信していくべき時であるのは間違いありません。

その点で、歯科が患者さんの顔と口腔を継続観察できる立場にあることにも改めて留意していただきたいと思います。歯磨き状況、咬合力はもちろん、シワ、たるみといった見た目の老化具合が、ある種の疾患やひいては寿命などに関係があることがわかってきたからです。

特に老化度が急速に進行するときは危険です。患者さんの口腔や顔に現れる変化や異常に敏感になり、その意味やリスク、対策をわかりやすく伝えられるヘルス・コミュニケーターになることで、口腔の健康だけでなく、患者さんの人生の守り人としての役割も高めていっていただきたいと願っております。

歯科医療の今までと今後



尾崎 哲則 先生

日本大学 歯学部 医療人間科学 教授

「むし歯の洪水」という言葉をご存じでしょうか？1960年代には、子どもの口の中はむし歯だらけ、これをまず治療しなければから始まり、次いで「子どもの歯を守る」に移っていきました。母子・学校歯科保健を中心に健康教育・保健指導が展開され、その成果が、近年12歳児のDMFTが1を割る形で見えています。さらに、この30年間に8020運動が展開され、2016年の歯科疾患実態調査で8020達成者が50%を超えました。これらは、歯があるという形態的なゴール達成をしました。これらは目にみえる目標であり、達成のためには「適切な生活習慣を築いていく」ことであり、また、これは全身の健康を推進することであることが知られるようになりました。

しかし、歯科の究極の目標は「一生自分の歯で食べられる。」ことです。すなわち、「食べる」機能が求められています。これに関しては、摂食・嚥下療法が歯科領域から実施されるようになったばかりでなく、口腔機能低下・発達不全という病名が確立され、医療保険制度の下で、徐々に対応がなされるようになっていきます。

一方、「人生100年時代」に向けて、歯科医療機関での、いわゆる「削って詰める」などの治療行為は減少し、国民の多くが定期的なメンテナンスを受けるようになっていきます。このような中、歯科領域でも遠隔診療が始まり、アプリを使った日常の健康支援が始まると予想しています。この中での歯科保健の役割にも新しい方向が出てくると考えています。

生涯自分の歯で過ごすための 歯周病予防・治療



石原 裕一 先生
公益財団法人ライオン歯科衛生研究所
日本歯周病学会専門医・指導医

高齢者の口腔内の現状について、1989年には8020運動（80歳で20本の歯を保つことを目標とした歯の健康づくり運動）達成者は約10%（10人に1人）であったものが、2016年には50%（2人に1人）を超え、ひとえに歯科検診や保健指導の充実・強化の結果と思われます。しかし、高齢者の現在歯（残存歯）の状況を詳しく見てみると、4mm以上のポケットまたはう蝕を有する人の割合はそれぞれ50%以上、70%以上となり、調査ごとにその割合が増加してきています。このことは、今の高齢者は歯を多く残せるようになってきたが、残っている歯は歯周病や根面う蝕等に罹患し健康ではないということが言えます。

特に、歯周病は咀嚼・発音・嚥下といった口腔機能低下につながるだけでなく、生活習慣や加齢に関与する糖尿病、心臓病、誤嚥性肺炎および認知症と深くかかわることが明らかとなってきています。

そこで今回の講演では、高齢者の残存歯数だけでなく、歯周病やう蝕の現状をおはなし、次に歯周病がどのような全身疾患に関連しているか、臨床研究や基礎研究の結果を紹介します。そして高齢者の歯周病予防・治療を推進するには、どのような取り組み方が患者のモチベーション向上につながり、高齢者のセルフケア習慣化にどんな方法が効果的であるかについて、演者のこれまでの臨床経験を踏まえてお話しいたします。

新しい生活様式、with コロナの中での 臨床現場における歯科衛生士の役割



池上 由美子 先生
がん感染症センター都立駒込病院
主任歯科衛生士

世界中に重大な混乱を引き起こしたCOVID-19 のアウトブレイクは、我が国の歯科診療機関においても多種多様の混乱を引き起こし従来の価値観も根底から覆しました。2020年3月5日版の The New York Times 誌に掲載された記事 “The Workers Who Face the Greatest Coronavirus Risk”(by Lazaro Gamio)によると、COVID-19感染症の感染リスクが、もっとも大きな職種は歯科衛生士という報告が出されました。

2020年4月6日に厚生労働省から「歯科医療機関における 新型コロナウイルスの感染拡大防止のための院内感染対策について」が出され、そこでの「標準予防策の徹底」と「歯科診療上の留意点について」はこの感染と立ち向かう上での一助となったと思います。

私は、がん・感染症センター都立駒込病院に勤務しており、当院は国内発症の最初である武漢、クルーズ船の感染者から現在に至るまで多くのCOVID-19感染者を受け入れてきました。

そこで今回のセミナーでは、①コロナのBefore・After ②コロナ禍の歯科衛生士が行う環境管理・歯科衛生士教育・職制として社会への貢献についてどう立ち向かうか？③withコロナの中歯科衛生士が目指す口腔健康管理とは、この3点についてお話しさせて頂き皆さまと共に、COVID-19とこれからの新しい生活様式での歯科衛生士の役割について考えていきたいと思っています。